

### 【必要な組織】 第3回

社会や生活の維持に必要な仕事があります。食糧の分配、病気や事故への対応など、地味だが生命にかかわってくる仕事です。学校という団体では、目標を合意し、カリキュラムを組むことなどもそういう仕事になるでしょう。こういう仕事が法令など社会的ルールに則っているかをチェックする仕事も大事です。

競争する組織は、近視眼的に考えれば、トップダウンで決める組織が「強く」見えます。こういう組織はどうしても、専門化がすすみ、丸山のいう「タコツボ型」になりやすい。そして利潤追求や役員報酬の確保などが優先されると、合意を重ね知恵を集めていく議論の場が減らされ、組織の維持に必要な地味な仕事は「ただちに組織の〈健康〉には影響がない」ものとして軽視されていきます。

「国会」は、近代日本の維持にとって必要なもの



でした。まだ国会がなかったとき、その開設を求めたのが自由民権運動です。ここで植木枝盛えもりは、政府が国会を開設しないなら、自分たちの手で「私立国会」をつくっていかうと主張しました。

維持に必要な仕事は、時に「雑用」と言われますが実際は、大局的な視野と具体的に仕事を進めていく知恵と実力が求められます。

日生連の主張する（つながり）に、教科や学校種をこえたつながりがあります。教科と教科、学校と学校のあいだの調整は、学校の維持にとって必要不可欠です。学校では、それを議論する場が減っています。誰かがやらなければならない仕事です。

（研究部・加藤聡一）

#### 〈参考〉

- ①丸山真男「思想のあり方について」（『日本の思想』岩波新書、岩波書店、一九六一年、一九五七年初出、二九、一三九ページ）。
- ②坂野潤治『体系日本の歴史⑧ 近代日本の出生』小学館ライブラリー、小学館、一九九三年（一九八九年初出、六八～六九ページ）。